

●犬吠(油彩画) 真喜志 卓

銚子のシンボル白亜の灯台を遠くから望んだものです。灯台の手前は屏風ヶ浦。10kmにわたって続く40~50mの断崖絶壁でドーバー海峡の岩壁に似ていることから「東洋のドーバー」と呼ばれています。手前の岩場の情景に魅せられ、ダイナミックに黒い縁取りの厚塗りで描写し屏風ヶ浦は控えめにしました。



●森(書) 国分 ひろみ

複雑な生態系を持つ森、縄文人が暮らした森、夏休みに蝶や蝉を追いかけた森、アリゾクを見つけた森、暗くて怖い森…<目を閉じると開く森(桂久爾の詩)>…目を閉じているんな命の聲を聴こう! 作陶者/鉄谷泰三氏



●旅の思い出(油彩画) 鈴木 橋夫

現在コロナ禍による自粛で、自宅での巣ごもり生活が6カ月もつづき辟易としています。思えば、今から6年ほど前には、愛犬と山中湖公園で駆けずり回り、一服の清涼を求めて大きな木の中でしばし巣ごもりしたことを思い出しました。



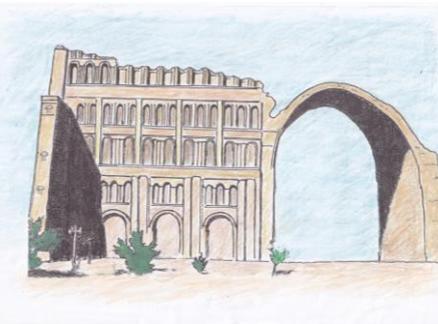
●上賀茂神社(水彩画) 川本 明生

今年の美術作品展は残念ながら中止となりましたが、「古建築を描く」と題して出展する予定だった16枚の葉書絵(ペン+水彩画)の中から、いろいろ迷った末に桜満開の京都上賀茂神社を描いたスケッチを選んでみました。



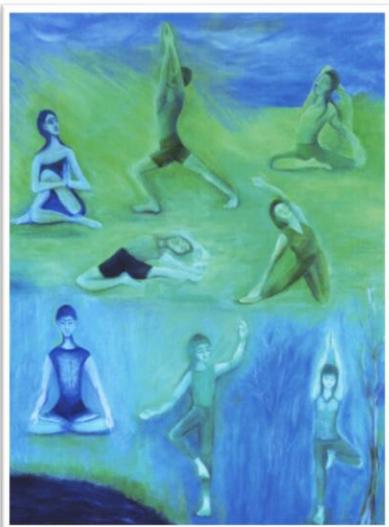
●瀬祭魚(篆刻) 植木 俊光

- ①かわうそが正月にその捕らえた魚を並べて祭ること。祖先の祭りをするのだという。
- ②詩文を作るときに多くの参考書をひろげらること。正岡子規は、その居を瀬祭書屋と号した。



●イラク「ホスロー宮殿」跡(色鉛筆画) 岸川 公一

バグダード郊外クテシフォンに遺るササン朝ベルシャのホスロー1世が西暦550年に建造した同宮殿は、ローマ帝国の「水道橋」技術を採用した地上37mの大アーチと前面開放式広間を持つ代表的イスラム(イェール)様式の建築物です。アーチを中心に左右両翼から成る構造でしたが、二十世紀初頭のチグリス川の氾濫で左翼部が流失、右翼部のみが残った状態で現存しています。



●ヨガ曼荼羅(油彩画) 杉浦 博子

今年の美術展に出展予定だった作品です。上野「2019 新作家展」への出品作ですが、去年の稲門会ですでに50号を出させて頂いたので二作目は控えた次第。本年は是非、地元で観て頂きたいと思っていました。大学時代より続けているヨガを曼荼羅的に描いたのですが、未だ道遠かです。



●慈愛(書)加藤 和子



●金剛力士像(エクセル画)大島 建雄

悪を山門の中に入らないように、にらみを利かしている金剛力士。全ての人々がコロナウイルスに罹らないようにと願いを込めて描きました。



●影法師(写真)渡辺 武経

オーストラリアの比較的緯度の低い地域の夕方の撮影です。緯度が低いので影法師が長くなり、足の長い写真が取れました。赤い砂漠、影の長さ、日本の風景との違いに興味を持ち撮りました。



●沼田城址(写真)関口 朝四

沼田城址公園より遥かに三国峠を望むこ沼田は真田の城下町。市章は桔梗。春・夏・秋・冬美に彩られた望郷の地である。

